

関西現代俳句協会 会報

No. 34

2005. 10. 30

二〇〇五年度「総会」特別講演

現代俳句協会と私

講演・和田悟朗顧問



(拍手)

皆さん今日は。和田悟朗であります。ぼくの話は後で何を聞いたか分からんという定評があるので、今日はそういうのを止めて、分かる話をしたと思います。というのは、今日も新入会の方がお出でになっています。年々新しい会員は増えていますが、しかし古い会員の方も

入会してみたけれど、現代俳句協会という会はどういうものかということ、十分に理解されていない、ということもあるかと思えますので、ぼく自身の勉強のつもりで、現代俳句協会とは何かと言うことを振り返って見ました、その一部分をお話したいと思います。

ぼくは小学校や中学校、高等学校の頃は、多少は俳句をやっておったわけですけども、いい加減にやっていたところが、大学を出まして、昭和二十四、五年頃のことですが、突如として凄いいことに出会ったわけです。それは何かと言いますと、ぼくは化学が専攻ですが、その化学の先輩として菟原逸朗と言う先生がおられました。ぼくより十三歳年上です。

ぼくはその頃ふとした事からその菟原先生に接するようになって、主に専門の方の話をしていました。その先生は時々、ぼくの研究室へ来られて、いろんな話をしておたのですが、その先生が帰られた後、ふと見たら紙くずみたいな紙が一つ落ちていました。

それを拾い上げて見ると、そこに鉛筆の走り書きで、俳句らしいものを書いてあったので、びっくりしました。「春めくや物言う蛋白質にすぎず」というのです。俳句の中に蛋白質というような、今まで誰も入れなかったような言葉

がずっと入っている。そういうことに驚いたし、その時分は戦後すぐですから、蛋白質の研究は、まだ始まったばかりであつて、外国でどんな風に研究が進んでいるのかと言うことは、戦争中は全部ストップしておるわけですから、日本にとっては非常に新鮮な、新しい研究分野であつたのです。

今日では蛋白質というのは当たり前のように入りますが、当時はやはり良く判らない物質であつた。そういう意味あいの中で、その蛋白質という言葉が俳句の中に現れた。この句の意味は、物を言う蛋白質、これは主語が入つていませんが、人間はということですね。「人間は物を言う蛋白質にすぎない」ということで、動物として、他の昆虫や犬や牛と同じく蛋白質から出来ている。しかしそういうものとは違つて、地球の上では非常にずば抜けて威張つてゐる。それは、人間は物を言うことができるからだけのことではないか。つまり「すぎず」と言うのは、それだけのことじゃないか、と言う威張つた意味の使い方と、それから謙遜した意味ですね。ちよつと物が言えるだけで、こんなになつてゐると、或いは今度は逆に言うとその物を言うということだけが、こんな差を生んでいる。そういう意味にも取られるわけですね。

で、この人間は猿が進化したものだと言われる。その頃、古い地層から人間らしき骨なんかが発掘されまして、夫々

の地域に応じて、ナントカ人と言われたのが若干あります。例えば、クロマニヨン人と言うのはフランスの古い地層から出て来て、猿ではなく人間に近い格好をしている。或いはネアンデルタール人、ドイツでしたかね、その辺から出てきた頭の骨があります。

それからジャワ原人というのがあるんですね。ピテカントロプスです。それもあるんですが、その当時は、それも皆人間の祖先だと思つていた。

現在では人間の祖先は、ホモ・サピエンス。アフリカから全世界へ広がつて行つたホモ・サピエンスだけであつて、クロマニヨンとかネアンデルタールとか、ピテカントロプスと言うようなものは、人間の祖先ではないと言われています。

そのわけは、骨をよく調べてみますと、この喉のところの骨の構造から、これは物が言えるような骨じゃないということになつてゐる。物が言えるのは、ホモ・サピエンスだけなんですね。そういう風に、ごく微妙な違いで物を言えるということになつて、それが進化して行つて、現在の人間になつて行つたのです。

ちよつとの違いで物は言えなかつた。そんなことがあつて、ぼくはそれに刺激されて俳句を作り始めたのです。それで、菟原逸朗さんは「白燕」に所属しておられたので、ぼくもその句会に出るようになりました。そこには橋間石

先生が居られたわけですね。それで白燕の句会にはなるべく頻繁に参加しておりました。

実はそれとまったく別に、もう一つぼくが関係していた会があります。それは神戸の「神戸市民同友会」と言う会です。そこは文化的なこと、神戸の歴史とか文学とかを扱う会なんです、そこに俳句会があつて、毎月俳句の会をやっております。その俳句の会の主宰者が赤尾兜子さん。ある時、あれは昭和三十二年のある句会の時、赤尾兜子さんが「音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢」と言う句を出されたのです。一斉にこの句は凄いと事になって、冬ですが火鉢の火も無くなったのに、夜遅くまでその火鉢を囲んで、皆熱烈に議論したことがあります。それがやっぱり案の定、あの時代の代表的な作品と言うことで、今日も残っておるわけです。

その様にして赤尾兜子さんと句会をやっておったんですが、兜子さんは閒石さんと違って、非常に積極的に何でもしようと言う。そこで昭和三十年に『坂』と言う雑誌を皆で作りました。その『坂』の途中ですよ、今の「音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢」は、『坂』は三十五年でやめて、別の雑誌『渦』と言うのを始めたわけです。その『渦』は今日まで続いております。

で、昭和三十六年でした。ある時ぼくに電話が掛かって来ました。あの時分は電話は殆ど無いですよ。ぼくが

居た大学の中にも、いくつかしか電話が無かった。もちろん、個人の家には電話はありません。

「和田さん、電話！」と言うので、パーツと廊下を走って、離れたところの電話機をとってみると、赤尾さんの声で「俺なあ、協会賞を取ってんや！」と言うので、ぼくが「協会賞って何ですか？」と言ったんです。それで赤尾さん怒って、「お前、アホか」。そこで「おめでとうございます」と言わんとあかんかったんです。ところがぼくは何のことやら分からなかった。まあ赤尾さんを怒らせたことはいくつもありますが、これもそのうちの一つで、その後この賞の意味が分かって「そら、凄いな」と思ったわけです。その後、大阪で盛大な祝賀会なんか開いたりしました。で、それが「現代俳句協会賞」なんです。

「現代俳句協会賞」と言うのを関西で最初にとられたのは鈴木六林男さんでして、それが昭和三十二年。そして赤尾さんが二人目で、昭和三十六年でした。そうやって赤尾さんは、非常に若くして凄いのをとった。恐らくその時（赤尾さんは昭和の年数と同じ歳なんです）二十六歳。ところでその後勢いづいて、関西では次の昭和三十七年には堀葦男さんが受賞されました。堀さんもその当時の前衛俳句のチャンピオンでして、「ぶつかる黒を押し分け押し来るあらゆる黒」で、これはなんのことか、黒というものをどういう風にイメージするかによって、その理解が出来

るわけですけども、それはいろんな人が考えています。それから「見えない階段見える肝臓印鑑滲む」。階段なんか外から見えるのに、見えないと言っている。肝臓は体の中にあつて見えないけれど、見える肝臓と言っている。そして印鑑滲む、恐らく印鑑は洋服のポケットへ入れておけば、肝臓の近くにあるわけで、それが滲んでいるということです。堀さんはそういう句を作られたのです。それから堀さんはメキシコへ行つて俳句を作った。外国旅行俳句を作った第一番目ではなかつたかと思いますが、随分もてはやされたわけです。今では外国での俳句と言うのは非常に多いですけど、堀さんはメキシコへ行つて迫力のある句を沢山作られた。それが、昭和三十七年です。

それにまた続いて、昭和三十八年に林田紀音夫さんが受賞された。これは有名な、鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ」。立て続けに関西から「現代俳句協会賞」の受賞者が出ました。

それから二、三年おいて今度は、上月章さん。上月章さんはその当時尼崎に住んでおられたのです。今は京都近くの八幡市におられますが、活動の場は名古屋の方に移して居られるから、関西では今あんまり上月さんの印象は濃くありませんね。それから又、二、三年して今度はぼくがとつたんですね。「協会賞つて何ですか」と言っていたのに、ぼくは昭和四十四年に貰うことになりました。ぼくはその

年の前に『七十万年』という句集を出しました。『七十万年』の意味は何かと言うと、実はピテカントロプス、ジャワ猿人の骨が出たのは七十万年前の地層から出たんですね。それが新しいニュースになっておつたのです。

ぼくの祝賀会の時ある人がこう言いました。ぼくで関西は六人目ですが、それで早く野球チームが出来たらいいのにと。その後、二、三年づつ間があいて、杉本雷造さん、伊丹公子さん、井沢唯夫さん、これで九人そろつたわけですが、と言うだけで、別に面白い話でも何でも無いのですが、野球チームがそこで出来上がった。

ついでにその後の受賞者のお名前を言いますと、友岡子郷さんがとられたですね。それから宇多喜代子さんと森田智子さんが同時受賞。それから澁谷道さん。それから柿本多映さん、それで昭和は終わりです。平成に入つてからは久保純夫さんと花谷和子さん。二人だけです。ちよつとこれは物足りないのではないか、もう十七年にもなつているんですけど、平成になつてからの受賞者は非常に少ないと言つてあります。

それで、兜子さんの受賞の時に戻りますが、兜子さんが受賞された時、その選考委員会は二つに分かれました。つまり、兜子さんと最後に残つたのは飴山実さんですね。その飴山実さんと赤尾兜子さんの二人が最後に残つた。飴山さんのようなきつちりと有季定型という伝統的な俳句の形

式を守るような人の作品は、赤尾さんのような非常に近代的な前衛的作品と一緒に、二人受賞と言うことはありえないと言うんですね。つまり、まったくたちの違う二人が残っているわけですから、二人とも推すというわけには行かないと言うことで、最終的に兜子さんだけに絞られたのです。

しかし、そういう伝統的な俳句を作り続けて、有季定型を非常に几帳面に、厳格に守ってきた人たちにとっては、そういう前衛俳句のよく分からないような俳句は困るというところで、その翌年、昭和三十七年に中村草田男さんと西東三鬼さんとか、その他が現代俳句協会を脱退すると言うことが起こったのです。それが昭和三十七年で、現在も続いている俳人協会であります。

そこでそういうグループは断固として、非常に厳格に有季定型を守る。それに対し現代俳句協会の特徴は何かと言うと、有季定型を必ずしも守らないというのが方針なんです。従って、無季の俳句があったり、口語俳句があったり、定型を崩した破調の句があったり、そういうものを認めると言うのが現代俳句協会ですから、反対にぞつたい有季定型を守るといのように短くキチツといえるほうが、非常に厳しくてしっかりしている様に聞こえますね。そうではないんだと言うのが現代俳句協会で、ちよつとぼんやりした雰囲気です。

しかし、そうやってはつきりと分かれたものですから、

俳人協会の有季定型という事は今日すっかり守られております。現代俳句協会は、その俳人協会の方へ行ってしまった人が居なくなつたわけですから、あと堀さんやら前衛俳句の人が受賞し易くなつたと言う事は考えられます。

さて、現代俳句協会と言うのは一体どういう風にして始まつたかと言いますと、もう十年遡つて、昭和二十二年、その当時「新俳句人連盟」と言うのがあったのですが、ちよつと左がかつているというので、もう少しプロの俳人が団結しようというのです。その当時の世の中はまだ戦後すぐですから暮らしにくかつたわけですね。従つて俳句がどうのということではなくて、生活擁護、お互いに生活を守る。その為には原稿料を決める、原稿をタダで書いていけなとか、俳句を何処かに頼まれて出す時は、一句当たり何円とか、あるいは選句を頼まれた時には選句料を、そういうようなものをきちんと取るようにしようじゃないかとかそういうことで集まつた。

石田波郷さんそれに西東三鬼さん、神田秀夫さんとかそういう人たちがそういうことで集まつた。その中で、一つだけ、優れた俳句を作る人に賞を与えると言うのが「現代俳句協会賞」なんです。但し、第一回と第二回は茅舎賞といつて、名前が違つていて、第三回目から「現代俳句協会賞」と言う名前に変わりました。

現代俳句協会が発した時は、会員は三十八名。関西で

は初めからの会員は永田耕衣さん、ご存知ですね。永田さんは原始会員と言うんですかね、始めはそういう厳格な意味があったのですが、その後俳人協会の方がどんどん人数を増やして行くので、現代俳句協会も負けじと、会員を増やすということに物凄いエネルギーを注いだのです。例えば会員の数は、昭和三十年には百五十人を超えております。昭和三十五年には三百人を超え、昭和四十年には五百人、昭和五十年には千人を超えています。昭和六十年には三千人、そして平成の現在には八千七百九十二人。約八千八百人位となっています。

俳人協会はそれより多くて一万を超えています。夫々の全部の会員の平均年齢は、現代俳句協会の方が若くて、俳人協会の方がちよつと年寄りです。しかしどっちも平均七十歳台です。会員を増やすのに沢山増やしたいという気持ちと、逆にむやみには入れたくないという気持ちも又あるわけです。

始めの頃は会員になるには立候補しまして、その人の名前が配られて、それを選挙して、何票以上だったら認めるというようなやり方でしたが、その一方では、推薦会員と言う制度もありました。何人かの会員の推薦があったら会員にするというわけです。そうやって、会員は無茶苦茶には入れないぞと言いながら、会員を増やして行つたわけですね。現在、日本中の俳人の数は、百万人とか一千万人とか

言われていますから、一万人に充たない数の会員はやはりエリート集団といえるでしょう。

この会員数の伸び率は経済状態に比例するものでして、バブルの頃にはどんどん増えるのですが、それ以後はそれほど伸びなくて、しかも会を辞める人、亡くなる人、そういう人が増えて、会員の数がピークに達してから下り始めるといふ状況に達しているのですね。

関西の会員の数は、今年の三月現在千二百九十八名。今度三十七名の方が新しく会に入りましたが、反面、亡くなった方もずいぶん出ました。又、会費未納で除名される方もあり、そこで差し引きしますと、現状維持ということが難しいくらいで、やがて減っていくだろうと思います。

それで、元に戻つて昭和三十七年に現代俳句協会の中に関西地区会議と言うのを始めました。それは全国の沢山の会員の中で、関西地区にいる人だけで特別に集まつた会なんです。その名称が地区会議と言う名前です。

議長は榎本冬一郎先生。こういう会ができますと、余所でもできるじゃないかと言うことで、次に出来たのが名古屋地区でした。東海地区会議と言うんですね。その次に出来たのが北九州地区会議。これは北九州と言いましたが、始めの頃は山口県もその中に含まれていたようでもありません。その次に北海道、北海道もそういう地区を作ろうと言う事だったんですが、やっぱり人数が少なくて地区会議と

してはまとまらなかったのです。そこで、関西と東海と北九州のこの三つの地区会議と言うのがそれ以後ずっと今日まで続いて残って来たわけです。

さつきも全国大会の話が出ましたが、全国大会と言うのは東京がやって、関西がやって、東京がやって、北九州がやって、東京がやって、名古屋がやってとその四地区で持ち回りするわけです。これは大相撲と似ていると言われていますね。東京場所があつてその次が三月に大阪場所、五月に東京場所、七月が名古屋で、九月が東京、十一月が北九州と言う具合に、相撲なら一年で六場所やることを、現代俳句協会は間に東京をいっぺんづつ挟んで六年周期で回転するわけですね。関西は来年と言っておりますが、うまい具合に平成では六の倍数、六、十二、十八と言う年が関西で行う全国大会であります。

関西地区会議は昭和三十七年に出来たので、その後昭和四十六年に榎本先生に代わって鈴木六林男先生が議長になられました。その後昭和五十一年からぼくが議長をやった。榎本さんは十年、六林男さんは六年やったわけで、ぼくはやむをえぬややこしい事情でとうとうやることに成ったのですが、ずーっとぼくは十八年間議長をやりました。それは平成七年、地震の年までですね。

それでこの全国大会をやるのは、さつきも言ったように実に大変です。東京はスタッフが多いから、担当する人が

年々変わって行きます。しかし関西や他の地区ではそんなわけには行かないので、その地区の議長が、実行委員長をやらなければならぬ。そう言うわけで、地区で全国大会をやるということは実に大変でした。

全国大会の呼び物と言うのは、ある方が講演をされる、どんな講演かと言う事がいつでも興味を中心ですね。

関西では昭和四十一年の担当が最初ですね。その次が昭和四十七年。その次が昭和五十一年。関西でやるときは、はじめのうちは講演を二人お願いしたこともありましたが、昭和五十一年のときで非常に印象深かったのは、高屋窓秋さんが講演されたことです。高屋さんの演題は「美しい言葉」でした。

確か窓秋さんの「頭の中で白い夏野となつてゐる」。これなんか非常に際立った何か物を指しているのではなく、言葉が美しくその中でいろんなイメージが湧いてくる。そういうのがいいんだろうと思ふんですね。

その窓秋さんが「美しい言葉」として挙げられたのは「風立ちぬ、いざ生きめやも」。これ美しい言葉だということです。これは堀辰雄さんですね。堀葦男じゃなくて堀辰雄さんが『風立ちぬ』という短編を書いている。信州の追分か軽井沢あの辺りです。それを読んでもみますと、書いている本人の私と、その恋人の二人の話ですが、彼女が庭にキャンバスを立てて油絵を描いているんですね。信州の風景を描いて

いる途中で、ちよつと休憩と言うので休んで、二人が草に寝転んで話している。その時、突然、風が吹いてその画板がばたつと草の上に倒れた。拾い上げてみると草の葉っぱなんか一杯、油絵の乾いていない油の上にくつついていゝる。それをもう一度立て掛けて、さあ又描くぞというそのこと。その時「風立ちぬ、いざ生きめやも」と言う言葉が口をついて出たと書いて、これにポール・ヴァレリーの詩のフランス語が横に添えて書いてある。その訳なんですね。しかし「風立ちぬ、いざ生きめやも」、これ五・七なんですね。下に五をつけると俳句になる。そんなのを非常に美しい言葉と言うように窓秋さんが言われた。これがぼくには非常に印象的でありました。

そのように全国大会で何か聞いて帰る。ぼくは前に名古屋でも非常に感銘深かった話を聞いたのですが、今、思い出しません。それからもう一つ、平成六年ですね。地震の前年の、この年の大会に法隆寺の管長高田良信さんに講演をしてもらったことがあります。それはたまたま法隆寺が世界文化遺産になる直前であったか、或いは講演の時にはもう決まっていたのか、そのすれすれの時、丁度タイミングよく頼めたと思います。

高田さんはあちこちで非常に活躍される方ですから、丁度全国大会の日に早くから予約しておいても、途中で駄目になったと言われるのではないかと、大変心配して、亡く

なられた田仲了司さんと一緒に、二、三回法隆寺の高田さんのお宅へ確認に行ったことがあります。

そのときの講演が非常に面白くて、あちこちで講演をされていきますからうまいんですね。法隆寺がなぜ現在も残っているかと、つまり南都七大寺と言っても、他の寺は燃えたり潰れたり、再建したり移転なんかしている。しかし法隆寺は、始めは若草伽藍があつて、現在のものは再建したものだという説が有力ですが、それは奈良時代の話であつて、それ以後今日まで法隆寺は残っている。それは何故かと言うお話なんですね。

法隆寺は奈良でも離れたところにある。奈良市内、平城京でもなくて離れたところに聖徳太子が建立した。そして聖徳太子はそこへ馬に乗って通勤されていたわけですが、そのために戦火に遭わなかつた。しかし、やっぱり長い年月の間には、何かで火事になったり潰れたりするものですが、法隆寺は後ろに矢田丘陵という高い土地があつて、後ろから守られている、そういうような寺であつた。位置がいいということと、三百年毎に大修理をしたと言う事。それは修理を克明にやつて、一時的な修理とか、全然修理をしていないとか言うのでは駄目なんですね。三百年毎に大修理をして、昭和の終わり頃にも大修理をした。そのために古いものもすっかり残すことが出来た。

ところが明治の始め頃、廃仏毀釈が起こつたので、他の

寺なんかは随分壊されたりしたんですね。興福寺の五重塔も誰か買わないかと言うふうには、安い値で売りに出ていたんですけど、買っても使い道が無いというので、買う人も無かったようですね。

法隆寺は百万塔というのを沢山残して持っていた。百万塔というのは本当に百万個作って十の寺に十万個ずつ配ったのですが、残っているのは法隆寺だけなんです。そして明治になって法隆寺は百万塔を一つづつ売りに出したんですね。ぼくの家にもあるんです。買値は三十円位で、それは誰にでも売るんではなくて、学校とかきつちりした人しか売らなかつたのです。もちろん売った人の名前はちゃんと控えて在るらしいんですが、たまたま百万塔が残っていた為に大分助かつたらしいのです。それでも経済的に大分苦しい時代もあつたのですが、そういう時に正岡子規が「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」と言う句を作つて、それが有名になつた。それはまさに正岡子規さんのお陰ですという言い方ですね。ところが正岡子規が法隆寺へ行つたかどうかと言うのは、本当は怪しいのです。

法隆寺には「法隆寺日記」と言うのがあつて、いろんな人が訪ねてきた時、きちんとその人の名前を記録している。その当時も随分いろんな人が訪ねてきてるんです。けれども正岡子規の名前は見当たらない。むしろ正岡子規は別の随筆で、柿を食べていたら鐘が鳴つたのは東大寺の傍だつ

たと言うのです。東大寺の転害門と言う北の出入口のすぐ横に旅館があつて、彼はそこに明治二十八年に泊まつていた。そして、その娘さんに柿を剥いてくれと言つて、どんどん剥いてもらったものをどんどん食べていたら、ゴーンと鐘が鳴つた。あれは何かと聞いたら「東大寺の鐘の音」と言つたという話を、ちゃんと自分でも書いています。従つて、東大寺でも良かったのですが、法隆寺にしてしまつた。しかし俳人はこの事実と無関係に、むしろ九月何日かになると法隆寺の茶店で吟行会をやつたり、句会を開いたりする。そのお陰で法隆寺を訪れる人は多いので、これは俳人のお陰だと高田さんは言つていました。

それから「句集祭り」と言う年中行事を関西で始めました。昭和五十一年二月二十一日とぼくの手帖には書いてありますが、しかしどう考えてもぼくは思い出せないのです。と言うのは後になつて当日欠席したと言う事が判つて、なるほど思い出せない筈だと安心したということもあります。この昭和五十一年には関西で全国大会をやつています。だから二月二十一日に句集祭りをやつたのは、去年句集を出した著者と呼んで一緒に祝いしようとしたのが始まりなんです。

それで五十一年の十月に全国大会をやつたので、句集祭りは一遍きりの筈だつたのが、五十二年からぼくが議長になつてそのときの事務局長の高橋弘さんと相談して続けること

になり、昭和五十二年の暮れに第二回目をやったのです。それからずつと年末に続けることになったわけです。

次に会の名称の話ですが、昭和三十七年に関西地区会議が出来て、それからこの地区会議と言う名前はずつと残っていました。会長は議長であったのですが、昭和五十年代になって協会が、県毎に地区協議会と言うのを作ることに、関西も六つの府県単位に別れると言われたのですが、関西はそれは逆だということだったので、すでに関西は纏まっているのだから分かれる必要は無いということで、関西地区会議はそのまま残し、今までずつと来たわけです。

京阪神、大阪、京都、神戸は繋がった一つの文化圏だから外せないと粘ったまま来たのですが、東京へ行くと「ええかげんにせいよ」とよく言われたものです。それが昭和六十年に現代俳句協会は「〇〇地区現代俳句協会」と言う名称にするように規約で決めました。昭和六十年ですから二十年前です。東京の本部も急いで名称を変えなくていいと言っていました、いつまで良いかどうか判らないけれど、兎も角二十年近くそのまま続けてきたのです。

その後、地震の年。ぼくの次の議長に米澤弓雄さんになったが、ご自分の学校の校長になって、学校の復興とこちらの俳句の方も頑張られたので、体を壊しようとう亡くなられた。その後、議長不在のまま宇多喜代子さんが議長の代理を続けてきて、その後山本千之さんが正式に議長に就任

されたのです。

東京の本部はその後名称を変えるように勧めたので、山本さんは素直に変えてしまった。二年前だったか、それ以来鈴木六林男さんはご機嫌が悪く、私は鈴木さんをなだめました。「時の流れには勝てない」と言ったら、「そやなあ」と言うことで、以後鈴木さんは怒らなくなった。

新しい関西現代俳句協会という名称は地区を抜いているのです。関西現代俳句協会となり、昭和六十年の規約通りではないが、実質的には各府県と同じような動きをされているのです。ぼくは二十年たつて関西現代俳句協会と変わったことについて、時の流れとして抵抗する気はありません。

最後に、新しい地区としてやっていくことに対して、ぼくが現代俳句協会に接して来たその歴史をちよつとだけお話ししたわけです。俳句をするのは何故かと言いますと、字を覚える、言葉覚える、友達が出来るなど、どういう目標であつても構わない。歳が行くと、その内のどれかが駄目になって止めると言う恐れはあります。健康のため、頭脳の健康のためずつと続けるようにして頂きたいと思いません。

以上で終わります。どうも有難うございました。(拍手)

(記録・尾崎 青磁)

ご挨拶に代えて

関西現代俳句協会

会長 山本千之



関西現代俳句協会では去る六月四日の総会において規約の改定を行い、副会長については地区別に六名を選んだ。京都の豊田さん、大阪の豊長さん、谷下さんの

以前からの吉本さん、兵庫の赤尾さん、和歌山の藤井さんである。来年度には現代俳句全国大会が京都で予定されている。副会長諸氏はじめ役員・会員の一致結束した組織で大会を成功裡に乗り切りたいと思っている。大会委員長に就任された豊田副会長の奮闘を切に祈るものである。去る十二月には当協会を生み且つ支えられた顧問の和知喜八、鈴木六林男、桂信子の三氏を失い、協会のみならず俳壇としても大きな痛手を被ったが、今はご冥福を祈りながらご意志を体して協会の更なる発展に努めたいと思う。本年度の吟行は和歌山城とその周辺を取り上げ、協会活動の南部地区浸透のきっかけとなった。その他ホームページが佳境に入ったことを告げなくてはならない。幸いスタッフに恵まれて次ぎ次と企画が生まれている。新しい道の前途に光明を見る思いである。会員諸氏に一層のご協力をお願いしてご挨拶に代えたい。

関西現代俳句協会事業報告

平成16年7月～17年6月

この一年を総括して

当会もこの一年の間にかつてない変貌をとげた。今年の活動はこれらの変貌を基礎として実施された。

①名称の変更

「関西現代俳句協会」が発足した。

②規約の制定

関西独自の「一般規約」および「会計規約」が制定された。

③副会長の増員

役員・幹事数の適正化と来年十月開催の全国大会に対処するための副会長の増員。関西二府四県を会員数により京滋地区から一名、大阪地区から二名、兵庫地区から二名、奈和地区から一名、合計六名指名された(敬称略)。

会長 山本千之

京滋地区・豊田 都峰
大阪地区・豊長みのる
・谷下 一玄

兵庫地区・吉本伊智朗
・赤尾 恵以

奈和地区・藤井富美子

④関西における顧問制度の発足

協会の事業に貢献をされた八十歳以上の方々の役職定年制度を設け、その労に報いるため、貢献度の高い方を関西現代俳句協会顧問に委嘱。当初十八名である。

顧問を委嘱した方(敬称略・順不同)
花谷和子(藍)、森田透石(櫻)、立岩利夫(海程)、宇都宮滴水(京鹿子)、伊丹三樹彦(青玄)、北ざと(大樹)、板垣鏡太郎(白堊・渦)、村木佐紀夫(白燕・橋)、八木三日女(花・海程)、

和田悟朗（白燕）、竹村文一（雷鳥）、岡崎進一朗（龍鼻）、丸山佳子（京鹿子）、きだただす（伎藝天・風象）、津田正之（主流・杭）、友永佳津朗（雜木）、篠奈雅史（俳句作家・青玄）、高木青二郎（青門）の諸先生方である。（以上十八名）

各行事および事業の報告

①忘年会&句集祭

十二月十一日（土）大阪国際会議場に於いて実施。九十七名の会員および松澤協会会長のご臨席を頂いた。恒例の句集祭の参加は句集二十九点、評論・隨筆・詩集・写真集六点、映像一点、合計三十六点。今年からは墨書による句の披露の他にパソコンを使つての映像による披露も行った。

②『会報』第三十三号発行

収録内容は「総会」における伊丹三樹彦氏の講演「俳句の現代性」、「新会員の一句」、「琵琶湖クルーズ吟行」の報告と入選句。新制定の「一般規約」

計規約」、「新しく開設したホームページ」等々掲載した。

③関西会員の名簿を制作し、全員に配布した。

④インターネットによる「関西現代俳句協会ホームページ」開設。

会員はもとより会員以外の方のアクセスもあり、好評継続中である。

⑤和歌山城およびその周辺吟行実施
第二回目に入った各県持ち回り吟行

会は、六月十九日和歌山市にて実施。地元結社の多大の協力を得て終了した。参加は八十一名。（結果は本誌に掲載）

⑥二〇〇五年度総会

今年も六月四日、大阪国際会議場に於いて開催。参加七十一名。会長より昨年末には和知喜八、鈴木六林男、桂信子と三人の長老方が続けて亡くなられたので、これからはお三方の遺志を継いで発展させたいとの挨拶があった。

講演は和田悟朗氏による「現代俳句協会と私」。協会設立初期よりの裏話等俳人たちの話に聴衆も多大の感銘を受けた様子であった。（本誌に全文掲載）

⑦「愛知万博の一句」募集

東海地区に於いて万博が開催された

ので、関西の会員で参加した方から一句募集した。目下、松澤協会会長、東海地区森下会長他豪華選者により選考中である。

⑧各府県別歳時記刊行の企画

関西独自の地域別歳時記を一〜二年ごとに出版企画。紀行文と会員自由参加の俳句で構成する。まず奈良県を予定。

⑨企画委員会・運営委員会・幹事会・総会
企画委員会は、毎月必ず当面の問題

点につき検討し、まとまったものを年二回の運営委員会にかけ、それをさらに幹事会で決定するという手続きを踏んでいる。最終決定は総会である。

謹 悼

和 知 喜 八 先生

鈴 木 六 林 男 先生

桂 信 子 先生

ご逝去をいたみ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成十七年十月

関西現代俳句協会

世界遺産に登録された紀伊和歌山を舞台に

「和歌山城とその周辺地区」

吟行会・開催!

二〇〇五年度の関西現代俳句協会主催の吟行大会は、去る四月二十三日(土)、紀伊和歌山城を中心に開催された。折から好天に恵まれ、参加者は南国の陽光をいっぱい浴びながら、存分に吟行を楽しまれたようであった。



和歌山城は南龍公と讃えられた初代藩主の築城であるだけに、質実剛健の雰囲気は今も残っていた。いくつかの名園や簡素且つ頑丈な建物群の見事なたたずまいは参加者の句心を大いにそよめるものの、それを句に纏め上げることにそれぞれ苦心されたようであった。

紀州という土地は自然に恵まれ、また世界遺産に登録された熊野古道の玄関口であるこの和歌山市には、この他紀三井寺、和歌浦、養翠園等名所も豊富であるが、吟行会という纏まりのために地元の皆様から、この和歌山城という広大な場所を教

えて頂いたことが、この日の成功の一因であったといえよう。また、この大会の運営のため地元「群蜂」、「あざみ」の皆様のご協力を頂いたことを厚く感謝申し上げます。選者の諸先生方にも心からお礼申し上げます。

記

□日時 平成十七年四月二十三日(土)

□吟行 午前中自由に和歌山城など取材、午後句会

□句会場 和歌山市男女共生推進センター(あいあいセンター)

□選者 和田悟朗、藤井富美子、樟豊、吉本伊智朗、豊田都峰

□参加者 花谷和子、山本千之の諸先生

□賞品 優秀作品Ⅱ現代俳句歳時記(改訂版・学研文庫)一組

佳作賞Ⅱ図書カード

来年の本吟行大会は京都で開催する予定であり、同じ年の十月二十一日には二条城の真向かいの京都国際ホテルで全国大会を開催する。いずれにも多数の会員のご参加を期待したい。(中井不二男)

選者特選句

和田 悟朗 特選

鶯の時空城の時空や若葉炎ゆ
行く春の城をこわさぬよう登る

藤井富美子

小泉八重子

藤井富美子 特選

堂々と大蟻登る城の門
囀りに囲まれ城の火繩銃

村上はるか

河井 末子

樟 豊 特選

甲冑のなかに秘めたる青岬
蜂は宙にとどまり手まり唄流れ

坂本タミエ
野尻すゞ子

吉本伊知朗 特選

春落葉鯉残党の面構え
行く春の城をこわさぬよう登る

田淵 佳根
小泉八重子

豊田 都峰 特選

桜しべ降り南海に城残す
花曇西に紀の川配しおり

尾崎 青磁
西川 吉弘

花谷 和子 特選

八重桜空堀に陽の行き渡り
楠若葉城に裏坂表坂

岡田 由季
辻本 俊子

山本 千之 特選

木の芽風城は退屈していたり
天守まで届く潮の香みなみ吹く

小泉八重子
満田 三椒

選者入選句

和田 悟朗 入選

桜蕊先を急がぬ人に降る
クローバー空溢れ出す仰臥かな
新緑の中へ中へと深呼吸
黙考の重さに揺れる八重桜

大星キヨ子
小坂 節子
鷺山 珀眉
高瀬 博美

藤井富美子 入選

乗継ぎはカードで足りし楠若葉
沈黙の楠の大樹や春日影
桜しべ蟻の視線で考える
てまり唄紀州青石かぎろいぬ

田中 朝子
西川みどり
満田 三椒
山本 千之

樟 豊 入選

戦塵の城の葉桜揺れもせず
木の芽風城は退屈していたり
海風受く五十五万石のこいのぼり
鳩高く密使なるかや城若葉
空濠が街騒を呑む城の春
雑賀衆の眼がぎよるぎよると青葉騒
紀伊水道B29の夏が来る
花ぐもりかけもつこともなきひと日

楠本 義雄
小泉八重子
田中 朝子
辻本 俊子
士井 孝
富田 潤
富田 潤
豊田 都峰

桜蕊先を急がぬ人に降る
銃眼のひとつ一景春深し
黙考の重さに揺れる八重桜
わかみどり伏虎の鼻のむす痒し
若葉照る国や午報の手まり唄
雑賀衆の眼がぎよるぎよると青葉騒
城を背に今日を限りの残花かな
さざ波の光を返す楠若葉
小さき鬱石榴若芽を滲ませし
白蝶に従きくる夢の欠片かな
陣太鼓鳴らず紀の國よなぐもり

大星キヨ子
大星キヨ子
高瀬 博美
谷口とし子
辻本 孝子
富田 潤
西川 吉弘
野尻すゞ子
原田 猛
原田 猛
増田 耿子

吉本伊知朗 入選

銃眼のひとつ一景春深し
城と老いし紀州手鞠や春の雲
囀りに囲まれ城の火繩銃
虎伏の城大樹より鳥巢立つ
蝶生る城の井筒の間隙より
城趾の石生きて青く風光る
蜂は宙にとどまり手まり唄流れ
小さき鬱石榴若芽を滲ませし

豊田 都峰 入選

銃眼のひとつ一景春深し
刻印のある石垣や藤垂れる
野面積みの石の錆色山吹咲く
幾曲りしても城郭花は葉に
行く春の城をこわさぬよう登る
新緑の中へ中へと深呼吸
海風受く五十五万石のこいのぼり
雑賀衆の眼がぎよるぎよると青葉騒

花谷 和子 入選

銃眼のひとつ一景春深し
城巡り紀州の春を惜しみけり
つばくらめ天守は窓を全開に
春落葉鯉残党の面構え
刻印の城壁に生るとかげの子
堂々と大蟻登る城の門
深淵をのぞいておりぬ藤の花

大星キヨ子

河井 末子

河井 末子

高階 和音

高階 和音

寺田 須美

野尻すゞ子

原田 猛

大星キヨ子

尾崎 青磁

桑田 和子

桑田 和子

小泉八重子

鷺山 珀眉

田中 朝子

富田 潤

大星キヨ子

音羽 和俊

小砂見曙美

田淵 佳根

美濃部多津子

村上はるか

山本 千之

地を守ることに一途やキラン草

山本 千之 入選

つばくらめ天守は窓を全開に
蝶生る城の井筒の間隙より
樟若葉太幹叩けば閑の声
カフカの城よりもおぼろの城目指す
積石の石みな違う鳥雲に
陣太鼓鳴らず紀の國よなぐもり
場違いな堀に水鳥一羽もおらぬ
刻印の城壁に生るとかげの子

綿貫 伸子

小砂見曙美

高階 和音

十倉 和子

花谷 和子

花谷 清

増田 耿子

丸山 巧

美濃部多津子



右から藤井・花谷・吉本・和田・山本の各先生方



(右)樟・(左)豊田の各先生

新会員の一句

今年、現代俳句協会にご入会頂いた方々から一句づつ頂戴いたしましたので、ご披露いたします。(順不同)

薔薇園や花の数だけ風の来て
雪溪へ瀬音はげしくなるばかり
滝壺や避けし虹を湧き立たす
岩となる牧の黒牛大夕立
前線の北より下る花芒
朝顔や物言はでやはら咲くよ
二階から秋くるスカート翻し
島の灯の月より遠し旅三日
風ひらり水面が月の裏をみせる
遠き山近き小舟に梅雨の匂
海の日大きく晴れてあたりけり
かなかなや雲に夕陽が飛びうつり
夏霧や身延の山の森閑と
小鳥来て言葉ひとつ置いて去る
産土の盆にもよらで戦友の忌へ
藍襖の藍はしづもり梅雨の底
法師蟬唐招提寺に生れて鳴く
丸呑みのゴミ収集車秋の垣
百合の芯切り取り残酷だと思ふ
看板の襦衣の字京の路地薄暑
鯛雲檜皮の屋根にしづくほど
百歳の笑みがこぼるる菊日和
揚羽生まれ翔び立つ風を待ちてあり
壇上に並ぶ百歳敬老会
人間のがらんがらん木葉降る

半夜	吉田美彌子
半夜	二見ふよう
俳星会	志々見久美子
藍	田中 朝子
渦	三輪 昌英
海程	小松 京華
青玄	谷 喜久子
半夜	井上 昌子
層雲	高田 弄山
藍	後藤 充
半夜	鶴 美代子
半夜	船原 勝子
藍	福島 知子
俳句作家	原田タキ子
其桃	山本 散人
風樹	梓 真弓
斧	木村 幹
俳句作家	出口 民子
半夜	青木 洋子
半夜	田渕 柊花
俳星会	田中 静子
俳星会	高田 英子
天街	前田 霧人
俳星会	谷 八重子
白燕	小野田 魁

空蟬や心も綾の虚空かな
赤だしは無いかと名古屋人秋の宿
夏果ての窓を半開 白木樞
ひぐらしの響き背負いて捨つるあり

みちづれ 藤原 泰
海程 長尾 向季
青玄 福本 常美
一粒 山本 泉

企画部短信

一、「愛知万博の一句」募集企画・経過報告

愛知万博は周知のとおり、一二〇〇万人超の入場者を数えて九月二十五日、大盛況裡に閉幕しました。会員の皆さんから寄せられた作品は、九月末日をもって締切り、応募総数のべ八十五句が集まりました。現在、選句作業が鋭意進行中です。発表と表彰は十二月十一日の「忘年会&句集祭」で行う予定です。

二、現代俳句協会〇六年度・全国大会予告

現代俳句協会の全国大会は来年、関西現俳協の主催で、京都に於いて開催と決定。日程は平成十八年十月二十一日(土)で、副会長・豊田都峰氏(「京鹿子」主宰)が大会委員長に就任され、会場は京都国際ホテルに決まりました。

三、〇六年度吟行大会企画

〇六年度・吟行俳句大会案を検討中です。去る四月二十三日開催された今年度の「和歌山城周辺吟行」は、八十一名の会員のご参加を得て、無事終了しました。地元「群蜂」、「あざみ」の方々のご尽力に厚くお礼を申し上げます。

来年は、「京都」の予定です。ご期待ください。

四、奈良歳時記(仮題) 編集企画・経過報告

関西の各府県別に郷土歳時記をまとめて上梓しようという試みで、手始めに、事務局長尾崎青磁氏の「奈良歳時記」をベースに進めていきますが、出版社の選考に手間どり刊行予定は大幅に遅れています。謹んでお詫び申し上げます。

五、「忘年会&句集祭」十二月十一日(日)開催

恒例の「忘年会&句集祭」を開催します。今年の会場は昨年と同じ中之島の「大阪国際会議場」です。多数のご参加をお待ちします。
(増田 耿子)

2004年(平成16年)12月31日現在

2004年決算報告書

(関西現代俳句協会)

期首預金残高(定期預金)	2,300,000	期末預金残高(定期預金)	2,300,000
" (普通預金)	1,651,008	" (普通預金)	545,553
手持現金残高	362,149	手持現金残高	273,153
合 計(前期繰越)	(A) 4,313,157	合 計(次期繰越)	3,118,706

収入の部		支出の部	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
本部助成金(第一次)	2,430,000	総 会 費	1,117,947
本部助成金(第二次)	132,000	句集まつり	833,980
総会懇親会々費収入	348,000	出版印刷(名簿・会報)	648,280
句集祭懇親会費収入	440,000	吟行大会費	621,514
吟行大会参加費収入	462,000	I T 費	375,157
寄 付 金	25,000	助成金(青年部活動助成など)	55,755
預 金 利 息	569	事務局経費	1,379,387
(当期収入小計)	(B) (3,837,569)	事 務 費	192,713
		通 信 費	203,070
		旅費交通費	238,100
		役員手当	483,000
		会 議 費	158,914
		慶 弔 費	61,254
		雑 費	35,406
前期繰越	4,313,157	振込手数料	6,930
当 期 収 入 計	8,150,726	当 期 費 用 計	(C) 5,032,020

(A)期首繰越額+(B)当期収入計-(C)当期費用計=(D)期末資産残高・次期繰越額

□期末資産残高・次期繰越額(2004年12月末)

1. 定期預金(三井住友銀行千里中央支店)	2,300,000
2. 普通預金(同 上)	545,553
3. 現 金(事務局長預り金を含む)	273,153
合 計	(D) 3,118,706

上記の通り、平成15年の収支決算報告をいたします。

経理担当 中井 不二男

2005(平成17)年6月4日

監査報告書

平成16年(2004年)現代俳句協会関西地区会議の決算報告を監査いたしましたところ、上記の通り、適正に処理されたことを認め、報告いたします。

会計監査 小 泉 八重子 印

会計監査 若 森 京 子 印

2005年6月4日

2005年活動計画書

関西現代俳句協会
(単位：円)

期首定期預金残高	2,300,000	合 計	3,118,706
期首普通預金残高	545,553		
手持現金残高	273,153		

収入の部		支出の部	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
本部交付金(一次1200名分)	2,400,000	総 会 費	1,100,000
本部交付金(追加分)	100,000	句 集 祭	900,000
総会参加費収入	350,000	吟行大会費	550,000
句集祭参加費収入	450,000	愛知万博関連句募集	300,000
吟行大会参加費収入	132,000	出版・印刷事業費	600,000
預金利息	10	I T関連費	600,000
		助成金など	200,000
		事務局経費	1,590,000
		事務費	200,000
		通信費	200,000
		旅費交通費	400,000
		役員手当	560,000
		会議費	120,000
		慶弔費	50,000
		雑費	50,000
		振込手数料	10,000
前期繰越金	3,118,706	支出見込計	5,840,000
合 計	6,550,716	次 期 繰 越 金	710,716

青年部活動報告

青年部部长 村井隆行

いつも青年部活動にご理解いただきありがとうございます。本年度の青年部活動として、二DAYS句会と称し七月二日、三日の両日、滋賀県の守山市と栗東市で句会を行いました。今回は基本的には合宿ではなく、メンバーの皆様は土曜日か日曜日のどちらか都合のよい句会に参加いただく企画でした。一日目の守山市での句会は、十四名の参加をいただきました。初参加の方や、オブザーバーとして和歌山の川村祥子様にも出席いただき、充実した句会となりました。

二日目は守山市の隣の栗東市で行いました。参加者は申込みが少なく六名でした。しかし、少人数ならではのアットホームな句会になり、全句にわたり句評ができたことは有意義でありました。あと本年度は、十二月にクリスマス句会を予定しております。近付きましたら御案内いたします。

さて私も、久保純夫様より青年部部长を引き継ぎ六年が過ぎ、本年度で交代したいと思っております。新しい部長が決まりましたら御報告いたします。メンバーの方々には長期にわたりご協力をいただき、誠にありがとうございました。御礼申し上げます。

ホームページの現状と企画

二〇〇四年十月に開設した、関西現代俳句協会のインターネット・ホームページの現状と今後の方向性についてお知らせします。

ホームページアドレス
<http://www.kangempai.jp/>

1、ホームページの運営の状況
 本年一月より始めました「今月のエッセイ」は、執筆各位のご協力を得て、好評のもと推移しております。執筆依頼については、事務局からアトラダムにお願いしておりますが、今後ともご協力の程よろしく願います。

会員の句集紹介のページは、事務局に寄せられた会員の最新句集をその都度掲示させていただくことでページが充実してきました。

ただ残念なのは結社紹介ページです。このページだけは事務局で制作するわけにはまいりませんので、会員の関係各結社の情報を是非お寄せください。このページを見た方から見本誌が欲しいという依頼も時々ありますので、既掲載の結社情報の更新も願います。

2、ホームページ運営の方向性
 基本的には、会員の皆さんへの速報メディアとして運営していきたいと考えています。

イベントの予告や結果速報をはじめ、会員の皆様の通信手段として充実させていきたいと考えています。そのため結社を超えて、俳人の皆さんに連絡するメディアとして活用いただければ幸いです。

3、今後の方向性
 ホームページでの句会運営や、吟行スポットの紹介さらには最近増加している携帯電話からのホームページ検索への対応など随時進めたいと考えています。

(IT部 湖内成一)

ホームページに掲載中です！

一、二〇〇五年のエッセイ(今月のエッセイ)

一月	先人が残した遺産の継承	山本 千之
二月	椿	吉本伊智朗
三月	春の森	花谷 和子
四月	好きな時間	豊田 都峰
五月	好きな時間	赤尾 恵以
六月	曲水のまねごと	谷下 一玄
七月	天神祭の一夜	小泉八重子
八月	青高野	豊長みのる
九月	青伊香保	伊丹三樹彦
十月	極楽往生	谷口 洋

毎月はじめより一カ月間で交替します。執筆がまだの方にはいづれお願ひするようになりますが、順序は不同です。

二、結社紹介

藍	主 辛	花谷 和子
渦	主 赤尾	恵以
季流	主 小泉	八重子
京鹿子	主 豊田	都峰
京都俳句	主 磯野	香澄
杭	主 津田	正之
青玄	主 伊丹	三樹彦
半夜	主 辛	藤本草四郎
一粒	主 山本	千之

この項に各結社の紹介を掲載したいと思っております。時折会員外の方からも入会問い合わせや、雑誌購入等の依頼がありその都度その結社に連絡してまいります。ぜひご利用ください。

三、会員の著作

高橋将夫句集「炎心」	二〇〇五年十月
和田悟朗句集「人間律」	二〇〇五年八月
吉田啓郷句集「春蟬抄」	二〇〇五年七月
桑谷祐廣遺墨集「道」	二〇〇三年六月
安保美恵子句集「夏座敷」	二〇〇五年七月
山崎淑女句集「誹諧悠悠」	二〇〇四年九月
宮崎桂子「絵本の花」	二〇〇五年五月
伊丹三樹彦写俳集XIV「日本秋彩」	二〇〇五年五月
椰子俳句会「椰子アンソロジー2004」	二〇〇五年四月
福井ち糸子句集「藍の粒子」	二〇〇五年四月
伊丹公子詩集「黒い聖母」	二〇〇四年七月
伊丹啓子句集「ドッグウッド」	二〇〇四年二月